年頭のあいさつ

下妻市長
稲葉 本治

あけましておめでとうございます

皆さまには、希望に満ちた輝かしい新年をお迎えのことと心からお喜び申し上げます。

近年、急速に少子高齢化が進展する中、地方自治体は、市民の住みよい環境を確保し、将来にわたって活力ある社会を維持していくことで、人口減少に歯止めをかけることが強く求められております。本市では、「まち」と「ひと」を元気にするため、今年もさまざまな施策を展開してまいります。

足腰の強い財政とするため

行政が施策を効果的に実施するためには、住民のニーズを的確に反映した計画が不可欠であります。しかし、いかに優れた計画であっても、財政の裏付けなくして実現はありません。このことから、本市では、財政の健全化を最重要課題とし、効率的な市政運営に努めてまいりました。その結果、現在では、財政力を示す指標で改善が見られております。また、公共施設等を経営資源としてとらえ、長期的・総合的な視点でコストやサービスなどの最適化を図るため、平成27年度から「公共施設等マネジメント」に着手しております。

一方、自主財源を確保し、持続可能で足腰の強い財政を確立するため、積極的に企業誘致に取り組んでまいりました。おかげをもちまして多くの優良企業に進出していただき、その効果が税収にも現れつつありますが、既存の工業団地が完売の状況にあるため、新たに、鯨地区に工業団地を造成中であります。昨年2月に圏央道の茨城県内区間が全線開通し、首都圏から本市を含む茨城県南西地域へのアクセスが向上したことを追い風として、引き続き企業誘致に努力し、さらに活力あるまちを目指してまいります。

「地域資源」の活用

本市には、大勢の人々が集う複数の大型商業施設のほか、砂沼、大宝八幡宮、小貝川ふれあい公園、道の駅しもつま、ビアスパークしもつま、筑波サーキットなど多くの観光スポットがあります。さらに昨年は、市街地活性化の拠点として、屋根付き多目的広場「Waiwaiドームしもつま」と観光交流センター「さん歩の駅サン・SUNさぬま」がオープンをいたしました。この2つの施設は、これまで十数万の交流人口をまちなかに呼び込み、本市のにぎわいを創出しております。今後は、これら施設の活用に加えて、本市の自然、歴史、文化、産業等の「地域資源」を観光の振興や地域の活性化などに生かし、更なる交流人口の増加や移住の促進を図り、いつもにぎわいのあるまちを目指してまいります。

将来の下妻を見据えて

平成27年9月関東・東北豪雨により、本市の鬼怒川下流域は、大きな被害を受けました。その後、国、県および鬼怒川沿川の7市町が主体となって「鬼怒川緊急対策プロジェクト」を実施し、堤防整備、河道掘削などのハード対策と共に、タイムラインの整備とこれに基づく訓練をはじめとするソフト対策も進行中であります。また、今後、鬼怒川の管理用通路等をサイクリングロードとして整備することも予定されていることから、将来的には、他の沿川自治体と連携し、「ツール・ド・キヌガワ」といった構想も具体化してまいりたいと考えております。

現在、本市は、平成30年度からの10年間を見据えた「第6次下妻市総合計画」の策定を進めております。平成18年1月の合併以来、一貫した市の基本理念と将来像を掲げ、まちづくりを進めてきた本市でありますが、次の総合計画は、この基本理念を継承しながらも、社会情勢の変化や政策・制度の変更などを踏まえ、新しい時代に対応したものにしたいと考えております。さらに、国が推進する「地方創生」との整合性を図りながら、少子高齢化という大きな壁に挑み、「住むことが誇りに思えるまち下妻」の実現に向け、全力を傾注してまいりますので、皆さまには、引き続いてのご支援・ご協力をお願い申し上げます。

結びに、本年が皆さまにとりまして、飛躍の年となりますことを心からお祈り申し上げ、年頭のあいさつといたします。

新春インタビュー

下妻市果樹組合連合会 会長 粟野 陽一さん

下妻市果樹組合連合会会長。自らも約2.5ヘクタールの梨畑で息子さんたちと「幸水」「豊水」「あきづき」「新高」を生産し、農業者後継者が希望の持てる環境整備を進めています。

今月号では、平成29年11月に茨城県表彰を受賞し、ベトナムへの梨の出荷量100トンを達成した市果樹組合連合会の粟野会長に、平成29年の振り返りと新年の抱負について語ってもらいました。

■平成29年を振り返って

天候に恵まれ梨が大きく育ちました。特に「幸水」は、生産者の努力と7月後半に雨が多かったことで大玉に育ち、県内でも一番の大玉になりました。

組合全体の梨の生育が良かったので生産量も多くなり、売り上げも良かったです。これには、ベトナムへの輸出を開始したこともあると思います。

ベトナムへの輸出については、市や関係機関の協力がなくては実現が難しかったと思います。輸出申請手続きなどを他の生産地より先行して進められたことから、輸出と販売を優位に進めることができました。

輸出に合わせて、私もベトナムへ行き、販売や市場調査などをしてきました。ベトナムの印象は、若い人が多く、これからの経済成長が期待できる国で、梨の市場として大きな期待が持てるというものでした。流通業者などの「何としても、下妻の梨を売る」という気持ちが伝わり、「現地の方に喜んでもらいたい。そのためにいいものを作らなくてはならない」という思いが強くなりました。

ベトナムでの梨の販売価格は、国内より1割高く組合員の所得向上にもつながることから、組合の課題である後継者や産地の確保の解決に期待が持てると手応えを感じました。平成29年を振り返ると、下妻の梨を広くPRして、組合員に元気がついた1年でした。

■今年の抱負

昨年の実績により、ベトナムを新たな市場として魅力を感じた園地未登録の生産者から、組合には輸出の意欲が多く寄せられています。まず、市や関係機関の協力を得ながら園地登録数を増やすことを始めたいと思います。そして、ベトナムへの出荷量を増やしたいと考えています。

今年のベトナムへの輸出は、国内他産地との競争が厳しくなると予想されます。特に福島県産の梨との競争が厳しくなりそうですが、全国に先駆け販売した実績によって定着させた下妻の梨の魅力と品質で勝負したいと思います。そのために、現地で喜んでもらえるいいものを組合全体で作りたいと思います。その準備として、今の季節に梨づくりの基礎となる“土づくり”と“剪定”をしっかりとやっているところです。

梨づくりは機械化が難しく、私が始めたころと今でも作業がほとんど変わっていないのが現状です。しかし、今までの取り組みによって、良い売上げが見込めるようになり、梨の生産を始めたいという人も増えてきています。生産者の収入確保がカギとなるので、品質の良い梨を安定して出荷していく責任があります。

ベトナム以外にも、タイやシンガポールなどの市場への期待も大きいことから、喜ばれるおいしい梨を生産して、生産者が梨の栽培を続けて良かったといえる環境をつくっていきたいと思います。